

ワニユゴ(双頭の仮面)

八覚 正大

お前がこの部屋にやってきたのは いったったか
左右を向いた双頭の顔が その異臭とともに
存在感をいっばいに顕わして

私は しばらくの間 ベランダに干しておこうと思った
おそらく何十年も 儀式のたびに使われて
頭なんか ついぞ洗ったこともない

ブルキナファソの セヌフォ族の誰かが
……それを目いっばいにかぶって 踊りまくっていたにちがいない
その汗と土と 肉体と情動と……それらが
得体のしれない臭いの中に混ざっていたのだろう

一週間 いや一カ月 あるいは数カ月の間 それをベランダに置いて
この通気の良い 古い大きな団地の五階という最上階で
日本の風土に慣れてもらうはずだったのだ……

しかし 十数年に一度の ちょうど外壁塗装の年にあたっていて
ああ 団地はすっぽりとネットに覆われ
しかも時折シンナー臭い工事の真っ最中とあっては
いかんせんお前を それが終わるまで
部屋の中で飼っておかなければ ならなくなった

靈感のはたらく若い知人はすぐさま言ったのだ
「背負われてきた何かがある」

「得体のしれない魔物が出て来そうだ——」
両側に開いた口 大きな四本のキバと二本の角
ノコギリの歯のような鋭い尖り 上下合わせて十六本
開いた喉の奥から外界を覗き 彼らは踊り狂っていたのだ

もうすぐ 外壁塗装の鬱陶しかった工事も終わる
その時初めて

お前をこの日本の団地のベランダに出して
いっしょに満月でもながめよう
時にそれを被って 世界の闇を聴こう

五十階の高層ビルの屋上で 未来への雄叫びを上げる
そう 私の書いたあの「小説の主人公」の怪物になった狂犬のように
さあ もう一度 満開の夜空に命を滾(たぎ)らせよう
アフリカだ 西アフリカだ

人類発生の情動を
マグマのように噴出させる 快感に酔おう！